

經濟論叢

第 169 卷 第 1 号

日本の地価と設備投資（2）	古川 顕俊	1
ジェームス・ハリントン研究と J. G. A. ポーコック（2）	林 秉 俊	22
1950年代中葉家電流通機構の特徴	竹 澤 祐 丈	36
インターネット上における 個人の協働体系	大 内 秀 二 郎	51
会計制度の安定性と変化に関する 進化ゲーム理論的検討	淵 ノ 上 英 樹	69
《研究ノート》		
アダム・スミスの政治学をめぐって	篠 田 朝 也	87

平成14年 1 月

京 都 大 学 經 済 學 會

ジェームス・ハリントン研究と J. G. A. ポーコック（2）

——統治組織論と宗教性——

竹 澤 祐 丈

IV ポーコックのハリントン解釈

ポーコックに影響を与えた三つの先駆的解釈の分析を踏まえて，本節では，ポーコックのハリントン解釈を跡付ける。その議論の特徴を要約すると，第一に，ポーコックは，アリストテレス的人間観とある種のキリスト教的なそれとの歴史的相克のなかでハリントンを論ずる。第二に，本稿で問題としているハリントンの思想における統治組織論と宗教性との特異な結合関係に焦点を当てて自らの解釈を提示している。第三に，前記の解釈を根拠付けるために，〈世俗的に表明された宗教性〉という概念化——その是非が後に批判を浴びることになる——を施している。

ところが，ポーコックの議論の展開は直線的でなく，いくつかの逆説を含むので，ある思想の批判と継承を追跡するその分析は，理解が容易でない。この側面が，ポーコックのハリントン解釈やシヴィック・ヒューマニズム civic humanism 概念を巡る論争を錯綜させ，ポーコックとその批判者たちとの対立点を把握し難くしているのである。そこでまず，ポーコックがどのように先行研究の不備を指摘したのかを見る，次に，ポーコックの議論の枠組みとそれによるハリントン解釈を分析する，そして最後に，ポーコックのハリントン論の残したものの——ハリントンの宗教性の分析——を指摘する。

先行研究のハリントンへの接近法に関して，ポーコックは，次のように批判する。まず，トニー・ヒル，マクファースン流の経済決定史観に対しては，

「ハリントンは、最も素朴な意味においてさえ、彼自身の時代を経済社会として認識したのでもなければ、その結果として、土地所有が権力のあり方を決定する際のもっとも重要な要素であるとの結論に達したのでもなかった」と強調する¹⁾。換言するならば、「たとえジェントリの勃興が起りつつある時代とみなしたとしても、ハリントンがどのようにしてそれを認識したのか——[たとえば]情報の源泉や現代人とは大幅に異なる思考の作業範疇——ということに關して論理的な探求が依然として必要であろう」とポーコックは批判する²⁾。

次に、ゲーチ、ラッセル・スミス流の（共和主義と渾然一体となった）自由主義的ハリントン解釈を批判する³⁾。「ハリントンは、テューダー朝の到来と共に始まったと彼自身が言うプロパティの均衡における諸変化を、土地売買やその他の経済活動の結果生じた土地所有者の転移という術語においてというよりも、むしろ土地所有権に伴う法律上の諸義務の変化という術語においてみたのであった。そして、ハリントンが興味を抱いていたことは、典型的な自由人がある封建諸侯のための軍事力保持者であり、彼の戦闘行為のために参戦を義務づけられている広義の封建制的様式から、軍事力保有者が公共のための戦闘行為以外には参戦する義務を課されない自由土地保有者である自立的土地保有形態への変遷であった。」⁴⁾つまり、ゲーチやラッセル・スミスなどの解釈とは異なり、「ハリントンの民主政とは自らの土地と軍備とを所有する自由土地保有者の共和国なのであった。」⁵⁾このようにして、ポーコックは、ハリントンを巡る先行研究の不適切さを明瞭に指摘した。

これまでの解釈の不備を指摘した後で、ポーコックは、その独自の議論の枠組みと共に自らのハリントン解釈を提示する。ポーコックによれば、「ハリン

1) J. G. A. Pocock, *The Ancient Constitution and the Feudal Law: a study of English Historical Thought in the seventeenth century: a reissues with a retrospect* (1987 ed., Cambridge, 1987), p. 128.

2) *ibid.*, p. 130.

3) Blair Worden, 'James Harrington and *The Commonwealth of Oceana*, 1656', in David Wootton ed., *Republicanism, Liberty, and Commercial Society, 1649-1776* (Stanford, 1994), p. 97 も参照せよ。

4) J. G. A. Pocock, *Politics, Language, and Time: essays on Political Thought and History* (University of Chicago Press ed., Chicago, 1989), pp. 109-110.

5) *ibid.*, p. 110.

トンは古典的共和主義者 classical republican, イングランドの卓越したシヴィック・ヒューマニスト England's premier civic humanist であり, マキヤヴェッリ主義者 Machiavellian であった。⁶⁾この言明が, かれのハリントン解釈を簡潔に表現しているのであるが, 各々の名辞の妥当性やそれらを統合する代表人物としてハリントンを位置づけることを巡っては, 別稿で見るように批判を招いている。そこで, まず前記の各要素についてのポーコック自身の説明を, 次に, 17世紀イングランドにおいてそれらの要素が統合される過程をポーコック自身がどのように解釈しているのかを分析する。

「シヴィック・ヒューマニズムとは……個々人が市民として活動するときのみ, つまりポリスや共和国といった自立的な意思決定をおこない得る政治共同体において意識的・自立的政治参画者として行為するときのみ, 自己実現 self-fulfilment に向って個人が成長し得ると主張する」思考の様式である⁷⁾。そして, この思考の様式が, 「いかなる種類の世俗的自己実現 secular self-fulfilment の可能性をも否定するような, ある種のキリスト教的時間認識 a Christian time-scheme の枠組み」⁸⁾のなかで復活するためには, アリストテレス的(古典共和主義的)人間観と親和的な所与の思想的要素 receptors の存在の有無が問題となる。

この二項対立的衝突から古典古代的な市民像の復活の可能性を引き出すのが, ポーコックによれば, マキヤヴェッリアン・モーメント The Machiavellian Moment なのである。いわく, マキヤヴェッリアン・モーメントとは, まず, マキヤヴェッリと関連付けられる歴史的な自己了解の「契機 the moment であり様式 the manner」を意味する⁹⁾。したがって, これは単なるマキヤヴェッリの「政治思想の継承の歴史」なのではなくて, マキヤヴェッリとその同時代人

6) J. G. A. Pocock, 'Historical Introduction', in his edition, *The Political Works of James Harrington* (Cambridge, 1977), p. 15.

7) Pocock, *Politics, Language, and Time*, p. 85.

8) J. G. A. Pocock, *The Machiavellian Moment: Florentine Political Thought and the Atlantic Republican Tradition* (Princeton, 1975), p. vii. なお, 強調は引用者による。

9) *ibid.*

が論争していた目的——いかにして歴史的に自己を認識するか——を自らの課題とし、それを達成するための自分自身の方策の案出に努める「瞬間」を意味する¹⁰⁾。したがって、出された方策自体は様々であることになる。次に、マキャヴェッリアン・モーメントとは、不合理な出来事の流れのなかで、共和国の政治的・道徳的安定のための処方箋を求めるというマキャヴェッリが没頭した課題そのものを意味する¹¹⁾。したがって、マキャヴェッリやその同時代人の格闘の結果として、「重要なパラダイム上の遺産——均衡した統治や躍動的な力量 *virt* に関する諸概念、そしてシヴィックな人格形成のために軍事力とプロパティがはたす役割——」がこの継承の歴史において重要な位置を占める¹²⁾。この意味において、マキャヴェッリアン・モーメントは、「世俗の政治的自己意識が、歴史的に自己を認識するための諸問題を生じさせたという意味において」、継承の歴史を持っていたのである¹³⁾。つまり、マキャヴェッリアン・モーメントは、マキャヴェッリの課題と言説とを共有する〈継承〉の側面と、その課題に対する解釈者たちの多様な解答群からなる〈断絶〉の側面とを併せ持っているのである¹⁴⁾。

そして重要なことは、ポーコックによれば、17世紀イングランドにおいて、シヴィック・ヒューマニズムの復活形態である「政治に関する新古典的な着想 *a neoclassical conception of politics*」が、「ある意味において、ピューリタンの千年王国主義の継承者 *an heir to Puritan millennialism*」として立ち現れてくるということである¹⁵⁾。内乱期において、権威の体现者である国王と諸特権と自由の擁護者である議会とからなる相互依存的な「並立的忠誠対象 *double majesty*」としての伝統的国制の崩壊を促進する要因であり、またその後の新秩序形成の動因であるのは、ポーコックによれば、これまでイングランド人の

10) *ibid.*, pp. vii-viii.

11) *ibid.*, p. viii.

12) *ibid.*

13) *ibid.*

14) Cf. James Cotton, *James Harrington's political thought and its context* (New York, 1991), pp. 39-40.

15) *op. cit.*, p. ix.

行動様式のみならず政治に関する思考様式をも拘束していたものとは別種の「時間認識」と言説であった¹⁶⁾。つまり、従来の「時間認識」と言語慣習（古来の国制論 the theory of the Ancient Constitution など）に基づく思考法では、この忠誠対象の分裂に至る過程を説明することも、新しい秩序を構想することも出来なかったのである¹⁷⁾。「[伝統的な] 慣習の相続人であり遺贈者でもある個人は、……単なる『伝統墨守的な traditional』存在以上のもの、……つまり継承者であると共に創造的革新の担い手 creator でもある」という主張——それ以前の思考法においては両立不可能と思われていたもの——を可能とするのが、ポーコックによれば、古典古代的な能動的市民像の復活を準備する思考様式としての千年王国主義の時間認識——キリスト教の下で個人を能動体として描くことを可能とするもの——であった¹⁸⁾。

しかし、古典古代的な能動的人間像が、ある種のキリスト教的人間観と対抗しながら、どのような文脈で復活するのかを理解するためには、シヴィック・ヒューマニズムの（それはまたハリントンのでもある）「ピューリタンの千年王国主義の継承者」としての側面をさらに分析する必要がある。そのためには、ポーコックによれば、イングランドの知的伝統、とくに歴史的・神学的に特殊な諸文脈——その特異な世俗主義 Secularism——と関連付ける必要がある。なぜなら問題の核心は、その時間認識とそれに基づく現状変革への関与の仕方にあるからである。

既にポーコックによって示唆されたように、市民的能動性の母胎となるのは、千年王国主義の時間認識であった。それを更に厳密に言うならば、その「聖徒の行動主義の終末論的な特質——自らが活動する神聖な現在と、望ましいように決定するものとしての神聖な未来——」である¹⁹⁾。この時間認識は、イング

16) J. G. A. Pocock, 'England', in Orest Ranum ed., *National Consciousness, History, and Political Culture in Early-modern Europe* (Baltimore, 1975), p. 102.

17) *ibid.*, p. 109.

18) *ibid.*, p. 103.

19) Pocock, *Machiavellian Moment*, p. 337.

ランドの自律性と独自性の主張——「世俗の法の集合体、世俗の合法性、そして世俗の歴史」²⁰⁾——と相互に影響し合いながら、伝統の継承者であり、かつ現状変革の担い手である主体——しかし古典古代的な意味における能動的市民の完全な復活ではない——を形成し、その変革への関わり方を規定するのである。「まさにイングランドこそが、聖なる歴史というドラマにおいて、それを演ずる任務を帯びている」のであり²¹⁾、選ばれた聖なる国家としてのイングランドという劇場においてそのドラマを演ずるのは、(聖徒であることとイングランド人であることが矛盾なく統合された)「神によって選ばれたイングランド人 God's Englishman」なのである²²⁾。こうして、聖徒の終末論に依拠した時間認識は、聖なる国家としてのイングランドにおける政治＝宗教活動に積極的に関わることを要請するのである。したがって、ポーコックによれば、「カルヴィニズムの変種からイングランドのピューリタニズムを分別する黙示録的、千年王国主義的な色調は、……ある意味において、イングランドの世俗主義的・制度的国民意識の産物 the product of English secular and institutional nationalism」²³⁾ということになる。ここに、時間認識と、その発現形態としての統治組織論とが、特異な連関を持つものとして捉えられ、重要な分析対象としてポーコックによって認識されるのである。

では、ポーコックが聖徒の行動主義を、現状変革のみならず理想の統治組織の構築をもめざす動因と見做し、その時間認識と統治組織論との特異な連関を指摘することができたのはなぜなのであろうか。それは、聖徒の時間認識に関するポーコック自身の卓抜な概念化に依拠している。つまり、その時間認識を支えている宗教性そのものを分析するのではなく、その世俗的に表明された様式に焦点を当てて分析すること——(本稿で言うところの)〈世俗的に表明された宗教性〉という分析視角——である。換言すれば、「黙示録的次元は国民

20) *ibid.*, pp. 343-344.

21) *ibid.*, p. 343.

22) *ibid.*, p. 345.

23) Pocock, 'England', p. 109.

的な一つの「認識」様式、つまり、イングランドの聖徒は白らが選良たることとその国民たることを共に固有のものに見なす——『神によって選ばれたイングランド人たち』の一人としての聖徒——という結果を伴いながら、この国家こそ聖なる時間に存在し活動するものであると構想するための様式²⁴⁾が考察の対象なのである。「したがって、イングランドの黙示録、つまり選ばれた国家という教義は、複雑かつ特定の時間の枠組みにおける、世俗的であり神的でもある公共空間——そこでは個人は聖徒でありイングランド人として行動する——として「イングランドを」概念化するひとつの方法として見なされなければならない。……だからイングランドの黙示録的思考様式は、世俗意識の一つとして分析することが出来るのである。」²⁵⁾つまり、ポーコックの言うところの「世俗化」とは、神の存在の重要性を強調しない思想という意味での非宗教化を意味するのではない。そして、「世俗的に表明された宗教性」という概念化が、時間認識に表象される宗教性と統治組織論との特異な連関に焦点を当てる必然性を支えているのである。

ところが、ポーコックによれば、このキリスト教的な能動的主体を支えていた聖徒とイングランド人からなる「神に選ばれたイングランド人」という複合的な存在はいつまでも存続することは出来ない。なぜなら、その存在は、「選ばれた国家と選良からなる共同体」とが一致した政治的宗教的単位としてのイングランドが前提になっていたからである。つまり、イングランド人として「自分自身が諸制度へ緊密に関係づけられているがゆえに、当初は彼の国家こそが選ばれていると信じていた神によって選ばれたイングランド人も、それらの諸制度のうちのあるもの、あるいはすべてが、選ばれている国家の達成点としては相応しくないと感じるようになれば²⁶⁾、『相応しくない』諸制度を置き換えるために新しい諸制度を案出する」ことを躊躇しない「反律法主義の瞬

24) Pocock, *Machiavellian Moment*, p. 337.

25) *ibid.*

26) *ibid.*, pp. 346-347.

間」²⁷⁾を迎える。この時、神に選ばれたイングランド人は、〈選ばれた国家〉とは程遠いイングランドの現状に反発して、理想的な国家の形成を通じて〈選ばれた国家〉の再建を目指す〈イングランド人〉ではなく、聖なる共同体の形成を通して〈選ばれた国家〉の再建を目指す〈聖徒〉たることを選ぶのである²⁸⁾。

ここで問題になるのは、聖なる共同体の形成を通して〈選ばれた国家〉としてのイングランドをいかにして再構築するかということである。一方で、「選ばれた選良」という概念でこの再構築を果たそうとするのが、ポーコックがハリントンとの思想的異同を特に強調するヴェイン、ジョン・ミルトン (John Milton, 1608-1674)、そして第五王国派である。まず、ポーコックによれば、ハリントンと彼らの関係は、「選ばれた国家 the Elect Nation」の構成員の資質を何に求めるのかを手がかりに分析すべきである。時代状況から考えて、ハリントンは、「世襲的秩序よりもより手強い別種の貴族政の可能性、つまり聖徒たち、多数者にはことの本性上判断できない精神的な経験をもつことを要件とする選良、による支配の可能性について考察しなければならなかった。」²⁹⁾したがって、ハリントンは、「聖職者叙任は世俗の主権者 civil sovereign によって担われる世俗の選択行為 civil choice である」³⁰⁾と主張するだけでなく、「共和国、つまり全ての市民が平等である政治体制はまた、神の前において全ての市民が対等であるということでもある。その結果、共和国は、一種の神権政治 a theocracy であり、そこにおいてはキリストが君主なのである」と繰り返し述べるのである³¹⁾。この主張こそが、ポーコックによれば、「選良 elite や救いに予定されたもの elect として」自分たち自身のための権威を要求し、その結果として「共和国やキリストの王国を否定する」ヴェインや第五王国派とハリントンを分かちものなのである³²⁾。

27) *ibid.*, p. 347.

28) *ibid.*, p. 345.

29) *ibid.*, p. 395.

30) *ibid.*, p. 397.

31) *ibid.*, p. 398.

32) *ibid.*

そしてポーコックによれば、ハリントンは、マキャヴェッリの言説——均衡した統治、躍動的な力量、古典古代的な市民形成のための軍事力とプロパティ——を用いて、聖なる共同体の再建を通して〈選ばれた国家〉＝イングランドの再構築を説明しようとするのである。つまり、「ジェームス・ハリントンは、シヴィック・ヒューマニスト的思考 civic humanist thought とイングランド的政治・社会意識との統合、マキャヴェッリの軍事理論と自由土地所有のプロパティの重要性に関するコモンロー的理解との統合をもたらした」のである³³⁾。

ポーコックによれば、古典古代的な能動的市民像を支える思考様式を完成させるためには、第一に、運命と徳という二つの概念に基礎を置く思考様式が必要である³⁴⁾。エリザベス朝において、運命のイメージとは、現在ある秩序を正当化する目的に使われていた³⁵⁾。しかし、次第に、「古典的な市民像」と両立可能な「動学的な kinetic」秩序観——「均衡は、諸要素のベクトルのこととなる諸圧力、つまり相殺する諸活動によって維持され、そして、それらの諸力はあらかじめ定められたその本性（もしくは徳）に固定されつづけるのと同様に、それら自身の間でその関係をまっとうしなければならない」³⁶⁾——が支配的となる。この活動こそが、「相い矛盾するもの同士がその状態を脱する点において諸活動の均衡状態をもたらす」のである³⁷⁾。しかし、個人の活動にのみ依拠する秩序は、「運命に無防備」＝不安定であった。つまり、「国家組織と国民とは、諸個人と同様に、運命の車輪のうえに乗かるように野心がそれらを運命づけるのに応じて、隆盛や衰退をむかえる。ところが、共和国だけが、個々人が政治的存在となる条件として、徳を運命に立ち向かわせるよう仕向けることが出来た。徳とは、共和国の原理なのであった。」³⁸⁾ここに、「均衡した統治」と「躍動的な力量＝徳」という概念が利用可能となる。

33) *ibid.*, p. viii. なお、強調は引用者による。

34) *ibid.*, p. 349.

35) *ibid.*

36) *ibid.*

37) *ibid.*

38) *ibid.*, pp. 349-350.

第二に、シヴィック・ヒューマニズムの完全な復活に到達するために必要なものは、「権威は神から授かるものであり、また各自の階層を決定するものでもあるという中世的イメージ」の克服を可能とするものとしての、「ある領域内における安定性」を取り扱う言語である³⁹⁾。ポーコックによれば、安定性の問題は、「現世における[人間の]不完全性」に起源を持っている。いわく、全ての人間は「一般的な墮落[傾向]」を共有しているが故に、王であれ臣下であれ、自分自身の身分にかかわらず、この「墮落」から無縁であるものはいない⁴⁰⁾。特に、「知性の不完全性 the imperfection of intellect は臣下と王によって共有されているので、神から全ての墮落した人間に対して向けられている権威は、神意によってのみ only providentially、王king として特定の個人に委ねられる。」⁴¹⁾その結果、王は、「[集合的な知性・深慮・経験主体としての]彼の臣下に相対するとき、操作の主体であると同時にその客体、つまりお互いに政治的手腕の発揮を競い合うことに[対等に]関わる指導者と構成員であることになる。」⁴²⁾そしてまた、「イングランドの統治組織は、もはや、神や理性の権威からの直接的な産物なのではない。それは、統治に関わる三身分のすべてからなる人間の深慮 human prudence の考案物なのである。」⁴³⁾ゆえに、統治に拘る三身分の間の適切な均衡は、自己完結的なものではないので、ある別の決定因：「天に訴えること」を必要としている。「天は、自らの意志するところを、特定の権威の形態に対して先験的な支持を知らせるという形では示さない。そうであるからこそ、各個人は内乱の渦中において、自分自身の良心 conscience に従いながらも、武力を行使すべきか否か、つまり戦闘による問いかけの結果の中に表明された天の判断に訴えたのである。」⁴⁴⁾その結果、ポーコックによれば、「軍事力と兵員の維持が、公的な権威や公的な財政の中心課題となるので

39) *ibid.*, p. 352.

40) *ibid.*, p. 353.

41) *ibid.*

42) *ibid.*, p. 354.

43) *ibid.*, p. 362.

44) *ibid.*, p. 368.

ある。』⁴⁵⁾

以上を踏まえて、ポーコックのハリントン解釈を再確認しておきたい。ポーコックによれば、内乱期において、政治＝宗教活動への積極的な参画を要請する千年王国主義の時間認識と、マキャヴェッリの遺産としての古典的共和主義の言説とが、17世紀イングランドにおける古典古代的な市民像の復活を可能とした。そしてこの復活を体現しているのが、ポーコックによれば、ハリントンであった。ハリントンは、「自由土地保有者たちの民主政だけが、自己安定的なポリテイアを作り出すための広範かつ均衡の取れた方法による政治的権威の配分に不可欠な人的資源を持つのである。そしてそのような共和国は理論上、不死なのであると主張した」のであった⁴⁶⁾。そしてまたかれは、「市民に関する理論、それはイングランド人を市民として示し、[選ばれしものと]自認する聖徒たちの寡頭政よりも神に近い存在としてイングランドの共和国を提示する理論を展開した」のであった⁴⁷⁾。

ポーコックは、「どのようにして、人間は政治的動物つまり本性上市民であるというアテネ人の主張が、人間は宗教的であるというキリスト教の主張と、直接的ではなく逆説的な挑戦をしながら復活し、神の国という奇妙な政治的名前によって知られている超越的かつ永続的な神との交わりのなかで生きようになったのか、第二に、その結果生じた論争が、全ての信仰者が祭司であり、教会ではなく社会こそが真のエクレシア〔神の集会〕であるというプロテスタントの主張がもたらした帰結といかにして融合したのか」⁴⁸⁾というシナリオにおいてハリントンを論じた。

もちろんポーコックは、シヴィック・ヒューマニズムの復活を、「福音的、千年王国的 evangelical and millenarian」用語や、「ポスト・キリスト教的、ユートピア的 post-Christian and utopian」用語によって説明を施すことが可能

45) *ibid.*, p. 356.

46) *ibid.*, pp. 387-388.

47) *ibid.*

48) *ibid.*, pp. 462-463. なお、強調は引用者による。

であることを認める⁴⁹⁾。しかしポーコックによれば、問題の核心は、それらを「人格の世俗化 the secularization of personality」の反映として扱うこと、つまり時間認識に代表される宗教性とその発現形態としての統治組織論との関係として把握することにある⁵⁰⁾。したがって、ハリントンの宗教性はイングランドという特殊な磁場のなかでは、〈世俗的に表明された宗教性〉として、「共和国の再建の契機」と関連付けられながらポーコックによって論じられるのである。

V お わ り に

本稿では、ハリントン研究の進展のために、その思想における統治組織論と宗教性との特異な連関を分析することが不可欠であることを、その研究史に即して確認することを目指した。従って、その研究視角の先駆者であるジョン・ポーコックの解釈の特徴を把握し、そして、〈世俗的に表明された宗教性〉というその分析の枠組みの意義を見極めることに議論の重点が置かれた。

まず始めに、ポーコック以前の研究者による、民主主義者、ジェントリの代弁者、ブルジョア思想家という様々なハリントン解釈を分析した。その議論の目的は、ハリントンの全体像の素描ではなく、近代化＝脱宗教化という彼ら自身の歴史認識を裏付けるために、その思想を部分的に利用することにあった。したがって、世俗性と宗教性を対立的に把握する現代からの遡及的視角によってハリントンを裁断するので、宗教性に関する議論は、統治組織論の従属部分と見なされ、十分な分析を施されていないことが明らかとなった。

次に、ポーコックに影響を与えた先駆者の議論に見られる特定の思想の「型」に注目するハリントン解釈を扱った。しかし、世俗性と宗教性を対立的に把握する思考様式はここでも顕著であり、また思想の連続性を強調する余り、後代において始めて有効な解釈図式や分類を、時代状況の差異をこえて遡及的

49) *ibid.*, p. 463.

50) *ibid.*

に適用する傾向を持っていることを指摘した。

そして、アリストテレス的な人間観とある種のキリスト教的なそれとの歴史的相克のなかにおいてハリントンを論ずるポーコックの議論を分析した。ポーコックによれば、ハリントンは、「卓越」した「シヴィック・ヒューマニスト」、「古典的共和主義者」、そして「マキャヴェッリ主義者」であった。その議論では、統治組織論と宗教性との特異な連関の分析が、ハリントンの思想を理解する上で重要であることを強調していた。そしてその解釈を支えるのが、「時間認識」を軸にした思想分析と、〈世俗的に表明された宗教性〉という概念化であった。これらによってポーコックは、ヴェイン、ミルトン、第五王国派と、ハリントンの違いを、峻別することができた。

しかし、ポーコックのように、〈世俗的に表明された宗教性〉という概念を用いることで、ハリントンの宗教性そのものを直接的に分析しないことは、同時代における宗教的文脈の重要性を勘案するならば、ハリントンの独自性を同時代においてより明確に把握することの障害となるのではないだろうか⁵¹⁾。例えば、ハリントンが強調する市民の資質は、道徳的基礎ではなく物質的基礎に置かれていた。この視角は、ポーコックが解釈したように、「自認による聖徒たち」とハリントンの区別を明らかにする上では有効なのであるが、(別稿で扱う) ジョナサン・スコット (Jonathan Scott) が強調するように、他の同時代共和主義者のなかでのハリントンの〈異質性〉——道徳的資質や宗教性を直接的に強調しない例外——という新たな問題を生み出してしまふ。したがっ

51) しかしこのことは、ポーコックがハリントンの時代における宗教的要因を軽視しているということの意味しない (J. G. A. Pocock, 'Religious Freedom and the Desacralization of Politics: From the English Civil Wars to the Virginia Statute', in Merrill D. Peterson & Robert C. Vaughan eds., *The Virginia Statute for Religious Freedom: its Evolution and Consequences in American History* (Cambridge, 1988), pp. 43-73; *idem.*, *Virtue, Commerce, and History: essays on Political Thought and History, chiefly in the eighteenth century* (Cambridge, 1985) (田中秀夫訳, 『徳・商業・歴史』, みすず書房, 1993年), esp., pp. 41, 43, 55-56, 106; *idem.*, 'Introduction', in his edition, James Harrington, *The Commonwealth of Oceana and A system of Politics* (Cambridge, 1992), pp. vii-xxv, esp., pp. xxii-xxiii; *idem.*, 'The Machiavellian Moment revisited: A Study of History and Ideology', *Journal of Modern History*, 53(1981), 49-72, esp., pp. 56-58)。

て、アリストテレス的・古典共和主義的な思考様式と、ヴェインやミルトンなどの〈ある種の〉キリスト教的時間認識との対抗関係は、時間認識の差異だけではなく、他の論点を加えて、さらに詳細に分析する必要がある。そのためには、〈世俗的に表明された宗教性〉というポーコックの概念化を越えて、ハリントンの統治機構論と宗教性を架橋する議論に関する体系的な分析と同時代におけるその独自性を把握する作業とが別に必要となる。これが、別稿で考察するポーコック批判の核心なのである。

(完)

*本稿は平成13年度科学研究費補助金による研究成果の一部である。